

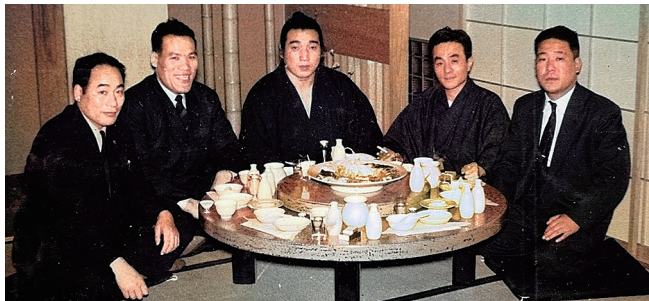


## 28代庄之助との交友(中)

### 腰に短刀の立行司

夏場所が初日を迎えた。

立行司は木村庄之助が不在のまま式守伊之助(61)が務めており約2年半が経過した。元関脇安芸乃島率いる高田川部屋所属である。元々は先代親方(大関前の山)の下に角界入りした。大相撲理事選出馬をめぐって高砂一門を破門され、無所属になった師匠の秘書役として多難な時期を乗り越え、立行司に昇進したが最近ばかり裁きをめぐり難続き。春場所千秋楽の相撲では朝乃山一正代戦で正代をよけ切れず土俵下に真つ逆さまに転落、軍配を上げられなかった。若い頃に比べ、太り過ぎのようにも見える。立行司は腰に短刀を差している。「差し違えたら切腹す



る」。その覚悟で土俵に臨んでいることの証しなのだ。

### 同郷から米ビツ入門

28代庄之助の格調の高さは見合ったものがあった。昭和29(1954)年秋場

所に富樫(柏戸)が入門した頃は26歳で木村林之助を名乗っていた。青年行司間の情報交換で富樫の所属する時津風一門の行司からウチに今度米ビツが入門したよとの情報を聞きつけた。米ビツとは相撲隠語の有望株という意味だ。「同郷。それも鶴岡に近い山添(櫛引地域)出身ということだ。オッ」となった」と注目し始めた。翌30年8月、林之助の十両格昇進を記念し、地元後援会が鶴岡巡業の勸進元(興行主)となつて、出羽海一門(千代の山、栃錦ら)を呼んだ。当時三段目の富樫もご当地力士として特別参加するなど、徐々に話す機会が出てきた。林之助は「富樫は物怖じしないんだ。ただ、なめてもいない。兄弟子、こういう時はどうしたらいいんですか? と尋ねてくる時も素直な感じで気持ちいいんだ」と好印象を持った。

「竹を割ったような性格。面倒なことは嫌いなタイプ。でも...」という言葉は訳は嫌いな人だった。腹はきれいだ。腹に一物がない。それで好きだったわけだ。若き日の柏戸を語る口調はいつも和やかなものになった。豆行司として入門しただけに経験も豊富で相撲界の伝統、しきたりに詳しくあった。現役時代の双葉山にも接しており、そうした名力士たちの逸話を話す機会があった。

戸と全く同じ身長だったが、足腰の硬さを補うことが、突き押し相撲の徹底だった。現役勢では千代の山は栃錦と火の出るような稽古を重ねた。千代の山の突っ張りで「栃錦の歯は何本かゆがんで、折れているが、それでもやめなかった」。栃錦は大型力士対策も兼ね下半身強化につなげ、千代も遠慮なく突っ張ったから強くなった。突っ張り一途の柏戸としては先輩たちが、どのような強くなったかを聞く機会があるのは非常に参考になった。いずれもためまぬ稽古で横綱への下地をつくったことを知った。横綱谷風が出た江戸時代の名門伊勢ノ海部屋に入ったといえ、入門当時は土俵も小さい部屋だったうえに、力士になることに当初積極的

でもなかっただけに、相撲の世界の教えを請うという意味では「先生」のような存在だった。

### まるで鯉の滝登り

こうした縁もあり35年の大関昇進パーティー以降、柏戸自身の希望もあって、一門は違っても、事務的なことの仕切りは全て林之助に託すことになった。本来昇進行事は一門単位で行うのが当たり前だったが、同郷だとしても異例。横綱

敬称略 富樫 嘉美

### 45日の横綱太刀山

例えば「45日」と言われた大正期の強豪横綱・太刀山。大柄な上に立ち合い直後の突き放しが強力で二突き未満(1月半45日)で相手を吹っ飛ばす取り口に異名が付いた。188と柏



若手時代の柏戸。物怖じしない性格で確実に番付を上げた。同郷林之助に学び、自らの糧にした



### 本紙で本場所講評

木村 庄之助(きむら・しょうのすけ)本名後藤悟)昭和3(1928)年12月15日、鶴岡市十日町の歯科医・赤松家に8人きょうだいの四男として生まれる。9歳で豆行司として松翁20代木村庄之助の下に角界入門。出羽海部屋に所属する。

毎週火曜日付に掲載